

パネル

分なり。皆業より生じ、業を所依と為す。業は能く諸の有情類の彼々の処所・高下・勝劣を分判す」と説く。しかし、器としての世界はそうではない。すなわち、「有情の類、此の処所に於いて共業増長すれば、世界便ち成じ、共業若し尽きれば世界便ち壊す。」(『大毘婆沙論』692c18)

有情は自ら所作した業(不共業)の別によつて、それぞれが種々の異熟の果報を受けるが、世間は自ら業を為すことがないので異熟果を受けることもない。一方、世間は有情の共通の業によつて生滅する。この世界の生滅にかかわるのを「共業」(saharapa-karman)という。これは他人と共有しうる結果をもたらす行為の力であり、世界を現象する原因である。山河大地などの環境世界は、多くの人々が共通に享受できるものであり、「共業」の結果である。この業の理論が輪廻と環境という世界創造の仕組みを解説するポイントとなる。そして、インド仏教の自然観もこの一連の考察の中で、捉えることができる。

日本仏教とエコ・フィロソフィ

竹村 牧男

仏教では、一個の衆生の身・心は、器世間に置かれて、生きていると認識しており、器世間の問題をけつして無視してはいない。仏教では、身・心と器世間、正報と依報、衆生と国土と

を、常にセットとして捉えているのである。

我々は過去世の業果として、人間界に生まれており、人間の身体を有している。この人間の環境世界は、娑婆とも言われ、穢土とも言われている。その環境と我々の個体は、決して切り離せないのである。しかし心を浄化することによつて、よりよい環境に生まれ得るといふ。

一方で、この世界は本来、浄土であるとの見方もある。『法華経』「如来寿量品」に、この娑婆世界は、実は久遠実成の仏のいます浄土であると主張されている。ちなみに、『法華経』に基づく天台宗の、一念三千の思想は、このことを理論化しようとしたものと見ることができであろう。

また、このことの表現の一つを、天台宗における「草木国土悉皆成仏」の議論の中に見ることができる。この句は日本の天台宗の教学研究の営みの中で作られたと考えられ、この思想の背景にある哲学・論理について、たとえば天台宗の忠尋(一〇六五―一一三八)作と伝える『漢光類聚』(実際には、一二五〇年ころの作らしい)には、まとまった形で示されている。これによれば、「草木国土悉皆成仏」の句は、「草木国土も成仏できる」という意味よりも、「草木国土は悉皆、成仏している」という意味にとるべきものである。

このように、人間世界の環境世界も仏を本体としていたの思想は、空海の密教にも示されている。一例に、『卍字義』には、「常遍の本仏は、損せず虧せず。汗字の実義は、汝等応に知るべし。水外に波無し、心内即ち境なり。草木に仏無くんば、波に則ち湿なけん。彼れに有つて此れに無くんば、権に非

ずして誰ぞ。……三諦円涉にして十世無礙なり。三種世間は、皆なこれ仏体なり。四種曼荼（大曼荼羅・法曼荼羅・三摩耶曼荼羅・羯磨曼荼羅）は、即ち是れ真仏なり。汗の実義、応に是の如く学すべし。……」とある。空海の他の文献にも、こうした思想を見ることが出来る。

このほか、禪宗の道元もまた、『正法眼蔵』『山水経』において、「而今の山水は、古仏の道現成なり。ともに法位に住して、究尽の功德を成ぜり。空劫已前の消息なるがゆえに、而今の活計なり。朕兆未萌の自己なるがゆえに、現成の透脱なり」と説いている。山水は仏として説法しているというのである。

というわけで、日本仏教の多くの立場では、むしろこの我々人間が住む娑婆世界がそのまま仏の国土であるのだと説かれていることを見た。以上の「仏教の環境観」は、サステイナビリティを追求する立場に対して、どんな意味を有していると考えられようか。以下、多少なりとも、その意義をくみ取ってみたい。

①自己と環境の不二の関係の理解に基づく、自己観・自然観の変化による自然環境への姿勢の改善。

②環境の仏国土性の了解による、自然環境尊重への根本姿勢の確立。

③心の浄化が自然の徳の顕現につながるこの了解による、環境倫理、ライフスタイルの方向性の明確化。

ほかにもあると思うが、ひとまず仏教思想の中に見出されるエコ・フィロソフィの可能性について考察してみた。

天人相関の理論と実践

——風水と煉丹術——

野村 英 登

東西の自然観をいうとき、しばしば我々は調和と支配を対置しがちであるが、中国では、人間は自然を生きていく上での規範としつつ、同時に統制の対象ともしてきた。その自然観を代表するのがいわゆる天人相関の思想であり、その工学的な実践として風水や煉丹術がある。それぞれの内容についてはすでに多くの研究が存在するので、その成果に拠りつつ、ここではエコ・フィロソフィを考える上での重要な論点を示してみたい。

まず儒教による帝国の体制理論を組み立てた漢の董仲舒から代表的な天人相関の思想をまとめてみよう。彼の議論で多く費やされているのは、「天地の間に陰陽の氣有り。常に人を漸（ひた）すは水の常に魚を漸すが若きなり。水と異なる所以の者は見るべきと見るべからざるのみ。……是の澹澹の中に治亂の氣を以て之と流通して相殺饌するなり。故に人氣和調して天地の化美たり、惡に殺（ま）じれば味敗る。」（『春秋繁露』如天之爲篇）といった自然観を背景として、「刑罰中らざれば、則ち邪氣を生み、邪氣下に積めば、怨惡上に畜（あつ）まる。上下和せざれば、則ち陰陽繆（みだ）れ盤（もと）りて妖孽生ず。此れ災異の縁りて起こる所なり」（董仲舒伝）として、人間の行いが天地の運行に機械的に影響を及ぼしうるという理論